

英華字典に見る人格関連訳語

The Terms relating to 'Person' in English and Chinese Dictionaries

後 藤 弘 志 (広島大学・教授)
Hiroshi Goto (Hiroshima)

はじめに

近世末から近代初頭にかけての英華・華英字典および英和・和英辞典についてはすでに分厚い研究の積み上げがある。本論考はその研究史に一石を投じるものではない。本論考は、近代初頭の日本における人格概念受容の経緯を、その徳倫理学的土壌という受容器の観点から辿り直すという研究プロジェクトの第一歩として、近世末から近代初頭に中国で出版され、明治期日本の西洋学術用語の翻訳過程に影響したとされる英華・華英字典における訳語例を調査することを主たる目的とする¹。その際、Person/Personality は言うに及ばず、Body、Character、Dignity、Duty (Obligation)といった〈人格関連訳語〉にも配慮する。

1. 研究プロジェクトの概要と本論考の位置づけ

〈人格〉という訳語の選定および定着の歴史的源流は、日本国内で言えば蘭学とそれに続く洋学時代の翻訳書および辞書類の編纂に、中国では、漢訳洋書および諸種の英華・華英字典の出版に求めることができる。この二つの源流が日本で合流し、その後、その他の和製学術漢語とともに中国に逆輸入されることになる。そこでまずこうした日中両国（間）における西洋学術用語受容の流れを簡単に確認しておこう。

沈力衛 (2001、271 以下および 285) によれば、中国における漢訳洋書刊行の流れは次の三つの時期に分けられる。

第一期 (16 世紀後半から 19 世紀初頭まで) では、マテオ・リッチを始めとするカトリック系伝道者たちの著作 (約 420 点) が挙げられるが、個人による恣意的な翻訳が多く、内容も基督教、算学、天文、地理に偏っている。実際に刊行され、流布されたものはさほど多くない²。学術用語に関しても、この時期に発達したのは天文、地理、算数の関係語彙であり、「地球、幾何、対数、顕微鏡」などが、はやくも日本語に入っているという。

第二期 (プロテスタントの最初の宣教師ロバート・モリソンが中国に上陸した 1807 年から 19 世紀末まで) では、プロテスタント宣教師たちの著作物 (約 1,000 点) が挙げられる。第一期より具体的な専門領域の書物が出版されている。また、この時期の特徴として、多くの英華字典が出版されている。

第三期（アヘン戦争により日本に先んじて西洋に直面した清朝廷が同文館を設立した1862年以降。一部は第二期と重なる）では、同文館などの外国書翻訳機構で出版された本（約300点）が挙げられる。朝廷主導の計画的翻訳事業、中国人と外国人の共同翻訳などの点で、前の二期と性格が異なる。この時期にはこれら漢訳洋書における訳語が系統的に日本に入ってきている。なかでも、当時の日本外務省の高官柳原前光が中国の翻訳館（江南製造局内）に赴き、1871年時点で入手可能なほとんどの訳書（ジャンルは数学、化学、地質、地学、航海、機械など）を一括購入し、訳語の参考にしたという（沈力衛2001、291以下も参照）。また、人文系では『万国公法』などが刊行されており、これらの文献が今日の日中同形語の形成に深く関わっているという（沈力衛2001、286）。

次に、第二期を特徴づける英華字典が日本の英和辞典や哲学辞典へ、さらには後者がその後の中国で出版された英華辞書に及ぼした影響史を、やはり沈力衛（2001）に依りながら概略する。第二期に出版された主な英華字典としては次の五つが挙げられる。

- ① モリソン『中国語字典』（1815-23）：Morrison, Robert, *Dictionary of the Chinese Language, in Three Parts*. とくに第三部（英華の部）
- ② ウィリアムズ『英華韻府歴階』（1844）：Williams, Samuel Wells, *An English and Chinese Vocabulary, in the Court Dialect*.
- ③ メドハースト『英華字典』（1847-48）：Medhurst, Walter Henry, *A Chinese and English Dictionary: containing all the words in the Chinese imperial dictionary, arranged according to the radicals*, vol. 1-2.
- ④ ロブシャイト『英華字典』（1866-69）：Lobscheid, William/Wilhelm, *English and Chinese dictionary: with the Punti and Mandarin pronunciation*, vol. 1-4.
- ⑤ ドーリトル『英華萃林韻府』（1872）：Doolittle, Justus, *Vocabulary and Hand-Book of the Chinese Language: Romanized in the Mandarin Dialect*.

沈力衛（2001、273）はこのうち①から③を前期、④・⑤を後期に分類して、漢訳洋書の三つの時期と次のように関連付けている。すなわち、前半期の辞書は第一期の反映でしかないのに対して、後半期の辞書は第二期の語彙も反映している。また、第三期の訳語は後半期の辞書に負うところが大きい。

次に、同じ時期に日本で出版された主な英和・和英辞典類を挙げると以下のとおりである。

- ① 堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』（1862）
- ② ジェームス C.ヘボン編『和英語林集成』（1867）
- ③ 柴田昌吉・子安峻編『英和字彙：附音挿図』（1873）
- ④ 和田垣謙三等編・井上哲次郎識『哲学字彙：附・清国音符』（1881）
- ⑤ 柴田昌吉・子安峻編『増補訂正第二版 英和字彙：附音挿図』（1882）

このうち、①と②は、江戸期以来の蘭学・洋学の延長上にあると言える。これに対して、(沈力衛 (2001) によれば、③から⑤には上に挙げた諸種の英華字典からの影響が見られる。言うまでもなく、もっともよく知られているのは、ロブシャイト『英華字典』から井上『哲学字彙』への影響である。ところがそれ以降、『哲学字彙』に見られるような日本独自の訳語が、次第に哲学、思想、社会の領域にわたって増え始め (沈力衛 2001、276)、いわゆる和製漢語逆輸入の時代を迎える。沈 (2001、267 以下) はこのことの証左となる興味深いデータを紹介している (宮島達夫の報告に基づく)。すなわち、現代語として基本的な 1000 語のうち、19 世紀初頭の日本語にはまだ 850 語しか登場しておらず、ゆるやかな上昇を経て、19 世紀半ばに急上昇する。これに対して、19 世紀まで先行していた中国語は、1875 年を境に変化速度の面で日本語に追い越される。そして、日本より 50 年遅れて中国語も急な上昇を示す。沈はこれを、和製漢語の逆輸入によるものであったと分析している。

以上のような日中間の語彙交流史を踏まえるならば、中国における漢訳洋書刊行の第一期は、近代初頭の日本における人格概念受容の経緯を辿り直すという本プロジェクトの枠内には収まりきらない射程を持っており、独立のプロジェクトを必要としている。また、日本においては、禁教時代が中国よりも長きに渡るといふ事情があり、この第一期に対応する南蛮文化時代における西洋学術用語との格闘と、近世末から近代初頭の人格概念を含む翻訳の努力との間に直接の影響関係を想定しにくい。したがって、日中両国におけるこの時期の経緯については、考察の対象から除外する。そこで、本プロジェクトは次のような工程からなる。

- I 明治期日本において様々な手法で考案されるいわゆる和製漢語の二つの源流として、
 - ① 上記第二期に属する漢訳洋書および英華・華英字典における人格関連訳語の調査分析
 - ② 日本の蘭学時代およびそれに続く洋学時代における辞書および訳書における人格関連訳語の調査分析
- II 近代初頭の日本における人格関連語翻訳の努力を、上の二つの源流のそれぞれとの連続と不連続において跡付ける。その際、次の二つの時期における英和・和英辞典類、各専門分野の辞典、学術書その他の文献に登場する人格関連訳語の調査分析を行う。
 - ① 様々な訳語例の内から、現在に至る訳語〈人格〉への一本化への歩みが始まる、明治 20 年代半ばまでの時期
 - ② それ以後も様々な立場からの解釈の間を揺れながら、〈人格〉という訳語が広く受容されるに至る時期 (終点は第二次世界大戦終結までとする)

本稿はこのうち、工程 (I) の①の漢訳洋書および英華字典における人格概念の調査分析に課題を絞りたい。ただし、その目的はあくまでも工程 (II) の対象時期に、漢訳洋書および英華字典が日本における人格概念の受容にどのような影響を及ぼしたかを探究するための準備にある。したがって、あらかじめ工程 (II)、なかでもその①の見通しについて若干

触れておく。

近代初頭の日本における人格関連語翻訳の経緯を、辞書を含む幅広い文献調査を基に跡付けた研究として、佐古純一郎『近代日本思想史における人格観念の成立』（1995年、朝文社）がある。佐古は、訳語〈人格〉の初出例として、谷本富「支那古宗教論」（『哲学会雑誌』明治22年5月号）を挙げている（佐古1995, 17以下）。佐古によれば、明治10年代から20年代には、これ以外にも Person あるいは Personality（あるいはその形容詞である Personal）には多様な訳語が当てられていた。例えば、〈人性〉、〈靈知有覚〉、〈品位〉、〈品格〉、〈有心者〉、〈人品〉、〈人位〉、〈人身〉、〈人物〉である（同書21以下）。それが『哲学字彙』（初版1881年）の編者井上哲次郎自身の証言にあるように、当時の東京大学における同僚中島力造の相談を受けて、井上が〈パーソナリティ〉の訳語として〈人格〉を勧めたのを機に「早速流行して、法律の用語にもなった」という（『井上哲次郎自伝』（1973、富山房）。佐古は、明治25年4月号の『哲学会雑誌』（第62号）雑誌欄の記事の中に〈人格〉という訳語が登場することを指摘し、この記事の執筆者が中島だと推測している（佐古1995, 26以下）。これ以前、中島は〈人位〉という訳語を、選定者の井上は〈人品〉という訳語を使用していた。いずれも漢籍に登場する語の借用である。これに対して〈人格〉は新造語であるとされている³。そこで、〈人格〉を含むこれらの多様な訳語の由来を、日中両国における造語法・訳出法（音訳と意訳、ルビ使用等）に関する先行研究を踏まえながら調査し、訳語に込められた意図に肉薄するという課題が浮かび上がる。

次に、調査対象となる語は Person、Personality、Personal にとどまらない。Person という語は、西洋においてはストア哲学とキリスト教の二つの思想的源流からなり、その典型的な定義である〈理性的個体〉は、人間概念とは完全には重ならない独特の含意を持っている。しかし、この概念は、西洋においても日常的には「一人の人」という程度の意味で用いられることが多く、近世末から近代初頭にかけての日中訳語もこのことを反映している。したがって Person/Personality の訳語だけからこうした文化的由来を嗅ぎ取るには限界がある。また、この概念は、ストア哲学とキリスト教のいずれの源流においても〈役割〉概念とのつながりが深く、〈役割〉を普遍的意味（例えば人間一般や理性的存在者一般の役割）で理解するか、特定の人間関係における特殊具体的意味（例えば家族関係における父としての役割、君臣関係における臣下としての役割）で理解するかとの二つの極の間で、その後の西洋思想史においても揺れ動いている。前者を原子論的解釈、後者を関係主義的（その意味で徳倫理的）解釈と呼ぶなら、近世末から近代初頭の日中において人格概念の翻訳が試みられたとき、輸入元はそもそもこのいずれの人格概念だったのか、そして輸入した側はそれをいずれの意味で解釈したのか、あるいは解釈しようとしたのか、またそれを表現するためにいかなる訳語が選ばれたのか（あるいはそうした意図は存在しなかったのか）を突き止めることが必要となる。そこで、受容装置としての徳倫理的土壌（端的に言えば江戸期の儒学）という観点から人格概念の翻訳導入の経緯を辿るという本プロジェクトの目的を達成するために、Person/Personality 以外の関連語彙として、Character、Dignity、次に Duty

(Obligation)、そして Body に注目する。その理由は次のとおりである。近代初頭の日本において、Character には〈品格〉・〈品性〉、Dignity には〈品位〉という訳語例がある。先に挙げた Person/Personality にも〈品位〉、〈品格〉、〈人品〉という訳語例があり、これらの概念は何らかの連関を持つものとして理解され、それが訳語の上にも表れていると推測することが可能である。そしてこの連関を支えたものがあつたとするならば、それが、行為よりも人の性格の良さに道德現象の基本原則を求めた徳倫理学であつたことは疑いない。この推測を敷衍すれば、Duty に〈本務〉・〈本分〉といった訳語が当てられたことも納得がいく。そして最後に、Body は、西洋語 Person が身体をその個別化の原理としているという理由で無視できないだけでなく、その訳語例である〈身〉と Person/Personality の訳語例である〈人身〉・〈本身〉との重なり合いは、〈分〉という徳倫理学的概念とのつながりを示唆している。

本稿では、これらの英語語彙の訳語を〈人格関連訳語〉と呼び、以上のような推測に従って、漢訳洋書出版第二期に当たる主要な英華字典を調査分析することにした。これらの辞書は、編集者本人が中国語の深い造詣を有するだけでなく、中国人に協力を得て編纂されたものとして、当時の中国が人格概念をどのように受け止めたかを知るための貴重な資料である。

2. 英華字典の系譜

上記第二期にプロテスタント宣教師の手によって出版された主な英華字典の系譜について、主に沈・倉島 (2006) に依りながら簡単にまとめる (沈・倉島以外に基づく記述についてはその都度出典を明示した)。

1723 年に清朝廷の禁教令による断絶の後 (ひそかに布教活動が続けられた南洋・ホンコン・マカオを拠点にした沿海地方や奥地の一部を除く)、1807 年にイギリス人宣教師モリソン (Robert Morrison 1782-1834) が来華し、大規模な布教活動が再開される (沈国威 2008、165)。モリソンは、1819 年に新・旧約聖書の中国語訳を完了した後 (宮本 2010、17)、1815 年から 1823 にかけて、第一部『字典』三冊 (『康熙字典』に基づいて約 4 万時の見出し語を収録し、画数・部首によって配列した華英字典)、第二部『五車韻府』二冊 (アルファベット順の華英字典)、第三部の英華字典一冊 (漢字名なし) からなる『中国語字典』を出版する。モリソンを派遣したロンドン宣教会がこの辞書の編纂を勧めた意図は、後続の宣教師の中国語習得に役立てることにあつた (宮本 2010、17)。第三部の英華字典は、中国を紹介する百科事典のような詳しい説明が施されており、英単語収録数は 1 万語足らずにとどまっている。また、最初の英華字典という開拓的な仕事であるため、一語一語の対訳ではなく、説明的な訳、つまり意識が多くなっている (陳力衛 2001、273) ⁴。用例の引用は『水滸伝』『紅樓夢』などの白話小説の他に、当時の漢訳洋書から拾い上げた中国語に英語訳をつけるという手法で行われたようで、これにより近代訳語が多数収録されている。逆に言えば、モリソンは独自の新しい訳語をほとんど作ろうとしなかった (朱 2009、142 以下)。

日本でも早くからモリソンの辞書、とくに『五車韻府』への関心は高かった。『中国語字典』の翻刻出版はなされなかったが、後続の英華字典への影響力は大きく、それらに反映された訳語を日本が受け入れたという観点から重要な文献である⁵。

アメリカ人宣教師ウィリアムズ (Samuel Wells Williams 1812-1884) は 1833 年に広東に渡り、布教と中国研究を行った。その後、海難事故にあった日本人漂流民から日本語を学び、ペリー艦隊の通訳として来日したことでも知られている (宮本 2010、82)。『英華韻府歴階』(1844) は、新しく開かれた条約港で使われる官話の知識をひろめて、現地人と外国人の交流を円滑にすることを目的として編集された (宮本 2010、85)。モリソンの英華字典を多く踏襲しつつ、これより 4,000 語多い 13,400 語を収録している。またモリソンのよりも訳語が短く簡潔であり、語彙集という特徴を持つ。現在まで使用されている近代訳語や、それに近づいた訳語が多くみられる。

メドハースト (Walter Henry Medhurst 1796-1857) はイギリス人宣教師として、中国に渡る前にバタビアで『英和・和英語彙』(1830)、『康熙字典』をベースにその漢字語をすべて取り込んだ『華英字典』(1842-1843) を出版している (宮本 2010、65)。1843 年、アヘン戦争後の南京条約によって開講した上海に移り、『英華字典』(1847-1848) を発行している。この英華字典は、モリソン『中国語字典』を基に、(2 字語以上に限れば) その漢字語の約 5 割、訳語のほとんどを継承し (陳力衛 2001、273)、これにあらたな訳語などを追加して作成された (宮本 2010、71)。『華英字典』の編纂を『英華字典』のそれに先行させたのは、後者のためには中国語についての一層高度な知識を得る必要があったからである。モリソンの強い影響の下、ウィリアムズの一対一対訳と異なり、その漢訳語は意識的であり (陳力衛 2001、273 以下)、さらに類義の訳語が配されている⁶。

ロプシャイト (William/Wilhelm Lobscheid 1822-1893) については多言を要しないだろう。ドイツ人宣教師として 1848 年に中国に渡り、香港・広州で布教と医療にあたった。1955 年には、通訳としてウィリアムズと共に日米和親条約締結に立ち会っている (宮本 2010、104)。1866 年から 1869 年にかけてロプシャイトが出版した『英華字典』は、中国語学習者、英語学習者および商業関係者を対象とし、英語の近代的語彙が増大する状況の中、とくに科学用語に対応する中国語を紹介するという課題を担った (宮本 2010、108 以下)。同辞書はそれまでの英華字典の集大成であり、実用的表現を重視し、近代漢訳語の宝庫でもある。先行する英華字典の中では最も多くを継承したメドハーストの漢字語がロプシャイト『英華字典』全体の中で占める割合は約 2 割にとどまっていることから、他を圧する充実度がうかがわれる (宮本 2010、103)。

訳語の考案、選定について言えば、張玉堂の序文にあるように、ロプシャイトは「文語、俗字を網羅して、古い意味を引き出し、新しい解釈を与える。広く用例を集め、他の書籍と照合した」。つまり、ロプシャイトも、新造語よりも、既存の語の援用や、意味の移転によって近代語の輸入に対応しようとしていたことが分かる。このことは、この時点における近代の新たな概念の導入は、量的にはこの手法で賄えたことと同時に、19 世紀末にさしかか

ると、「意味の移転」では政治・経済・自然・人文科学全般にわたる新概念の導入に対応できなくなり、新訳語を案出せざるを得ない状態に追い込まれることも意味している（張の序文日本語訳も含め、沈国威 2008、146 以下）。また、宋代以降の傾向である二字複合語の発展という観点では、ロプシャイトの英華字典はなお発展途上にある。すなわち、西洋近代文明の伝来によって二字複合語化の過程が加速するが、第二期の英華字典の辞典では、複合語の字の結合は緩やかで、複合語の構成成分である個々の字は、文字通り(字義)の意味において解釈されたため、訳語の意味は二つの字の意味の算術和となり、現代語より意味範囲がずっと広がった。古典籍からの転用語も同様の分析的理解によって訳語として用いられた。その後二字複合語は意味範囲の縮小と専用化の傾向を強め、いわばパッケージ化が進むが、ロプシャイトの英華字典ではまだ完成には程遠かった（沈国威 2008、197 以下）。

ドーリトル（Justus Doolittle 1824-1880）はアメリカ人宣教師として 1850 年に福州に派遣され、中国滞在の外国人、中国人の英語学習者、外国の中国語学習者の役に立てるべく『英華萃林韻府』（1872）を編集し、上海で刊行した（宮本 2010、153）。同辞書は二冊三部からなる。一冊目（第一部）は 17,500 の漢字、66,000 の英語の用例を、二冊目前半（第二部）は一冊目から抜粋した決まり文句（諺）や短句を収録し、二冊目後半（第三部）は 85 部門からなる分類語彙集となっている（宮本 2010、153 以下）。先行する辞書との関係に関しては、ウィリアムズ『英華韻府歴階』の漢字語の 9 割強を吸収している。また、ロプシャイトでは 2 割しか占めなかったメドハーストの『英華字典』の漢字語を多く吸収し、復活させている（宮本 2010、103）。

3. 英華字典に見られる人格関連訳語

まず、上記の主要英華字典における Person/Personality/Personal(ly)の訳語を一覧にして、その都度他の辞書とも関連付けながら、気づいた問題点を指摘する（ピンインは省略した。また、同語源の派生語は関連語欄に収めた）。

①モリソン『中国語字典』第三部：親字 Person に英語による言い換えが付され、これに 5 つの用例が続く。同語源の派生語は見当たらない。

Person, an individual man or woman, 一位人.	
用例	<p>This person is my friend, 這位係我的朋友.</p> <p>To take care of one's own person, 謹身.</p> <p>Wish to take their persons and property to offer as surety, 願将身家具保.</p> <p>Every class of persons, 諸色人戸.</p> <p>Only don't mention it to another person, 你只別和別人說就是了.</p>

同辞書に掲載された単語には、英語による言い換えが付されている場合とそうでない場合がある。言い換え付きの例は、〈Duty, tax or impost, 餉銀; 税〉、〈Each, every one of the

number, 毎)、〈Oblige; force; compel, 勒令; 強〉、〈Virtue, moral goodness, 徳; 善; 善良之徳〉など、決して少なくない。この辞書の中国語訳が意識的であることは研究者の指摘するところだが、中国語への変換を容易にするために英語という原語内で意識を施しておくという意図があったのかもしれない。

とくに親字 **Person** に付された英語の言い換えに関しては、この語に対応する中国語が存在しないという理由を推定したいところだが、〈Bonze, is not a chinese word〉のように、親字が中国語ではないことを明記した例も見られるため、**Person** に該当する中国語が存在しないと編者が理解していたとは断定できない。用例を見ても、むしろ哲学やキリスト教学の専門用語ではなく、中国語にも存在する一般的な語彙として扱われていたか、あるいは、少なくともこの辞書にはこの語が持つ西洋独特の文化的バイアスを読み取ることのできる手掛かりは見当たらない。

②ウィリアムズ『英華韻府歴階』(1844)：モリソン『中国語字典』との大きな違いは、親字と用例の明確な区別がなく、英語による言いかえや補足説明もなく、語彙集という様相を呈していることである。

Person, a 一位人.	
用例	Person, go in, 自行. Person, about the, 在身.
関連語	Personable man, 漢子. Personal interview, 見面. Personify, 像人; 倣.

③メドハースト『英華字典』(1847-48)：多くの点で、先輩であるモリソンの延長上にあるが、用例と同語源派生語が拡充されている。また、モリソンでは親字に英語による言い換えが添えられていたが、メドハーストには見当たらない(英語による言い換えは、その後ロブシャイト、ドーリトルで復活する)。

Person, 身, 位.	
用例	a person, 一個人. one person, 一頭, 一位. this person is my friend, <u>這位是我朋友</u> . to become surety in person and property, <u>以身家爲保</u> . another person, <u>別人</u> . persons 人口. living persons, 生口. one's own person, 躬. to take care of one's person, <u>謹身</u> .

	in person, 親身.
関連語	<p>Personal Property, 浮財; personal exertions are profitable, 躬行心得; personal explanation, 面伸; a personal affair. 本身的事; personal practice, 躬行; personal interview, 晤見; to cultivate personal virtue, 修身; personally present, 本身在; to go personally, 親去.</p> <p>To Personate, 代身; to personate the sovereign, 替王行事; to counterfeit, 伴爲他人.</p>

④ロプシャイト『英華字典』(1866-69)

Person, an individual human being, <u>一個人</u> , <u>一位</u> .	
用例	<p>to come in person, <u>親身</u>來, 自己來, 親自來.</p> <p>to go in person, 自己去, <u>親身</u>往.</p> <p>a certain person, 某人, 或人.</p> <p>supposing that a person, 設有一人.</p> <p>no person, 無人.</p> <p>the first person, 第一个人 ※个[カ、コ]=それぞれ</p> <p>the second person, 第二个人.</p> <p>another person, <u>別人</u>.</p> <p>every person, 人人.</p> <p>persons, <u>人口</u>.</p> <p>living persons, <u>生人</u>.</p> <p>I am pleased with this person, 我中意此人.</p> <p>about one's person, 在身.</p> <p>to come security in person and property, 俾自己身家做担保, <u>以本身家爲保</u>.</p> <p>an artificial person, 公會.</p> <p>a kind, pleasant person, 愜愜的人, 一味純善之人.</p> <p>to cultivate one's person, <u>修身</u>.</p> <p>five persons, 五個人.</p>
Personal, 身, 身的, <u>本身的</u> , <u>躬</u> .	
	<p>personal merit, 身功, 本功, 身之功勞.</p> <p>personal appearance, 容貌, 形容.</p> <p>personal considerations, 計自己.</p> <p>the just man is not influenced by personal considerations, 義士不問己之有無.</p> <p>personal interview, 面見, <u>晤見</u>.</p> <p>personal statement, 面伸.</p> <p>personal affair, 本身之事.</p>

	<p>personal practice, 自己嘅習行, 躬行.</p> <p>personal charms, 本身之美.</p> <p>the personal pronoun, 人之替名字.</p> <p>personal property, 浮財.</p> <p>personal esteem, 有情面.</p> <p>personal exertions benefit the mind, 躬行心得,</p> <p>personal servant, 侍仔, 事仔.</p> <p>personal attendants, 跟班.</p> <p>to become personal, 指人.</p> <p>a personal attack, 攻人, 攻身.</p>
Personality, 爲人.	
用例	<p>that which constitutes the personality, 所立爲人者.</p> <p>avoid personalities, 免指人, 不可指人.</p>
Personally, in person, 親自, 親身, 自己, 本身.	
用例	personally present, 親身在, 自己在.
関連語	<p>Personage, high, 貴人; character represented, 脚色, 所扮之人.</p> <p>Personate, to, 扮作, 粧成某人; to personate one's self, 自扮某人; to personate a king, 扮作王; to counterfeit, 粧成; to personate the ancients, 倣古.</p> <p>Personate, in botany, 獅口的, 像似獅口.</p> <p>Personating 粧成某人, 扮作某人.</p> <p>Personification, prosopopoeia, 以物爲人, 以物作人.</p> <p>Personify to, 以爲人, 以物爲人, 以物莫爲人.</p> <p>Personnel, 人; the personnel of an army, 軍之人.</p>

⑤ ドーリトル『英華萃林韻府』(1872)

Person or individual, 一位人, 一身.	
用例	<p>the said, 該人.</p> <p>a certain, 某人.</p> <p>go in, 自行.</p> <p>about the body or, 在身.</p>
Personally or individually present, 本身在.	
	to go, 親去.
関連語	<p>Persons assembled, the 聚會的人.</p> <p>Personable man, 漢人.</p> <p>Personal interview, 見面, 晤見;</p> <p>exertions are profitable, 躬行心得;</p>

	property, 浮財. Personate, another, to 代身; the sovereign 替王行事; or pretend to be another, 佯爲他人. Personify or imitate, to 像人, 倣.
--	--

このように並べて見ると、ロプシャイトは親字の数、用例の豊富さのいずれにおいても他を圧倒している。Person 関連語に関しても、Personality/Personal が親字として独立に設定されている点で極めて重要である。そこで、日本への影響度も考慮して、モリソン、メドハースト、ロプシャイトに限定し、それらの間の一致度を下線で示した（同一、あるいはほぼ同一と見てよい訳語に絞り、モリソンからメドハーストに継承された訳語には下線、メドハーストからロプシャイトに継承された訳語には波線、モリソン・メドハーストの両者からロプシャイトに継承された訳語には二重線を施した。なお、親字の訳語として継承された訳語に関しては、用例中の下線は省略した）。

本稿で取り上げている西洋語 Person と Personality との関係についてもう少し説明を加えておこう。Person の最も簡潔な定義は、先にも挙げた〈理性的個体〉である。Personality とは、Person 性、すなわち Person が Person であることを意味する。Person 性はさらに、理性的存在者であるという普遍的属性を意味する場合（→原子論的理解：この場合は身体によって個別化が行われ、個人は普遍のサンプルでしかない）と、いわゆるパーソナリティ（＝個性）を持つ主体として人間関係の中に置かれてあることを意味する場合がある（→関係主義的・徳倫理的解釈）。これを踏まえて、先に指摘した英語による言い換えに話を戻すと、モリソンでは〈Person, an individual man or woman〉となっていた言い換えがメドハーストでは消滅し、その後、ロプシャイトでは〈Person, an individual human being 一個人〉、ドーリトルでは〈Person, or individual〉として復活する。これを〈一位人〉という訳語を起点に整理すると、この語は、モリソンとウィリアムズでは親字の漢訳語として使われている。ロプシャイトが親字に当てた〈一個人〉も類義で使用されていると考えてよいだろう。これに対してメドハーストは、ウィリアムズが親字としていた〈Person, a 一位人〉を用例の位置に引き下げ、これにロプシャイトと同じ〈一個人〉という訳語を、そして、親字 Person には〈身〉・〈位〉という訳語を当てている。このような錯綜した事態にもかかわらず、これらいずれの辞書においても Person が「一人の人」の意味で理解されていること、そしてその個別化の原理として機能しているのが、〈身/躬〉であること、さらに言えば Person と〈身〉が言い換え可能なほど緊密な関係において理解されていることは確認できる。そこで、これらの英華字典において人格の個性がどのように理解されていたかを、他の訳語とも関連付けながらもう少し探索してみよう。

メドハーストにおける Personal/Personally の訳語〈本身（的）〉、in person の訳語〈親身〉は、ロプシャイトにも Personal 〈本身的〉あるいは Personally (in person) 〈親身〉・

〈本身〉として引き継がれている。ロプシャイトはこの二つの訳語に加えて〈自己〉・〈親自〉という訳語を併記している。この二つは上の英華字典のうち、ロプシャイトのそれにしか登場しない。〈自己〉に関して言えば、モリソン→メドハースト→ロプシャイトと引き継がれた類似の用例 *to come security in person and property* の訳語〈以本身家爲保俾〉に、ロプシャイトは〈自己身家做担保〉を併記している。問題はこれらの訳語が指し示している個別性のレベルだが、それが集約する仕方では現れて来るのが、ロプシャイトに新たに登場する *Personality* 〈爲人〉（あるいはその用例としての *that which constitutes the personality* 〈所立爲人者〉）であろう。この語は普遍的人格性と個性のいずれを念頭に置いたものだろうか。参考として諸橋徹次編『大漢和辞典』を見てみよう。人部では〈ヒトナリ〉という訓が添えられ、「①＝生まれつき、人柄、②ヒトノタメニス：イ＝人に見せるためにする、ロ＝人の爲にする。」という説明がなされている（初版 1955、修正版 1984）。爪部では〈ギジン〉という訓が添えられ、「①人のためにする。他人に知られようとする。出世の材料とする。②人となり。うまれつき。性質。」という説明が付されている（初版 1958、修正版 1985）。いずれの意味も古典籍を踏まえたものである。ここで大きく二つに分類される意味群のうち、本稿の主題と関連するのは、〈生まれつき、人となり、人柄、性質〉という系統である。もしロプシャイトにおける *Personality* の訳語〈爲人〉がこのような語史を踏まえたものであるとすれば、ロプシャイトの理解する *Person* 概念が関係主義的、その意味で徳倫理的なそれであると考えてよい。この場合、もう一つの意味群、すなわち人間関係における他者からの是認を指し示す意味群も、自然に回収できる⁷。

この解釈を補強するために、本論考が〈人格関連訳語〉と呼んだ *Body, Character, Dignity, Duty (Obligation)* のうち、紙数も限られているので、*Character, Duty* に絞って、モリソン、メドハースト、ロプシャイトの訳語をピックアップしてみる（*Character* の訳語のうち〈字〉系統、*Duty* の訳語のうち〈税〉系統の用例は省略した）。

①Character

〈モリソン〉

Character (or letter) Chinese, 字.	
用例	<p><u>Character of an person</u>, as 'He <i>is</i> a bad character,' 他是品性不好的.</p> <p><u>He has a good character</u>, 他有好名聲.</p> <p>To injure a man's character, 壞人的名聲; 丟人的臉.</p> <p>Regardless of one's character, 不顧聲名.</p> <p>Don't be fond of giving people characters, telling their merits and demerits, 勿好說人之長短.</p>

〈メドハースト〉

Character, a letter, 字.

用例	reputation 名聲, 品行, 行藏; a good character, 令聞, 好名聲; to injure one's character, 壞人名聲, 丟人之臉; regardless of one's character, 不顧名聲; to trifle with men's character, 說人長短; a foul character, 臭名.
----	---

〈ロプシャイト〉

Character, a letter, 字, 文字.	
用例	<u>the peculiar qualities, impresses by nature or habit on a person, which distinguishes him from others,</u> 品性, 性格, 品格; an account or representation of any thing, exhibiting the qualities and circumstances attending it, 原由; reputation, 名聲, 品行, 行爲, 行藏; a good character, 令聞, 好名聲, 好人; a bad character, 臭名, 惡人; a superior character, 上等人, 頂好嘅人; he has no character at all, 佢都唔顧聲名, 不顧面子, 拚居丟面, 他無品; of high character, 脚力大; to injure one's character, 壞人聲名, 丟人面子, 丟人體面; the character of sanctity, 聖人之聲名; to trifle with men's character, 道啖人, 說人長短; to give one a bad character, 講人不好, 說人不好; specific character, 表類者, 定類者.

②Duty

〈モリソン〉

Duty, tax or impost, 餉銀; 稅.	
用例	Not attend to the least thing beyond one's peculiar duty, 於本分外不加毫末. <u>Duty, that which a Person ought to do,</u> 本分. It is my duty, 是我分內之事. It is what duty requires, why should there be any thanks? 乃分所當然何謝之有 Duty, it is of soldiers to inure themselves to hardships, and guard against indulging in ease, 兵丁之責分應習勞戒逸. One's own duty, 己任. "A burden laid on one" 仁以爲己任不亦重乎, to reckon the attainment of perfect virtue one's bounden duty; is it not a weighty task? Duties of any office or place, 責任. Of him who holds this office are its duties required, 人有是職位則有是責任. Difficult to perform the duties of a situation, 難以勝任.

〈メドハースト〉

Duty, 本分.	
用例	the duties of filial piety, 孝道; the duty of morality, 人倫之道; the duties of an office, 職分, 職任; the duties of one's station, 分內之事, 己任; a duty or task, 功課; a duty with which one is charged, 責成; 責任, 責分, 責令; domestic

	duties, 家務; public duties, 公務; what duty requires, 分所當然; duties difficult of performance, 難以勝任.
--	---

〈ロプシャイト〉

Duty, 本分, 職分.	
用例	to perform one's duty, 守本分, 安分; obedience, 孝順者, 服法者; the duty connected with one's office, 職分; the duty connected with one's department, 分内之事, 己任, 責任; my duty, 我嘅責任; a soldier on duty, 兵丁守衛; to change one with his duty, 責成, 責任; domestic duties, 家事, 家務; constant duty, 常道; moral duty, 人倫之道; public duty, 公務; what duty requires, 分所當然; to do one's duty, 守本分, to pay one's duties to one, 拜候人; to apportion each one's duties, 撥撥; to neglect the duties but get the pay of an office, 尺位素餐.

本論考にとって重要な、〈Person〉を含む用例には下線を付したが、これに限らず、全体として、(1) 人間関係において各人には各人が果たすべき特殊具体的義務があり、(2) 各人がこの義務に適合的な行為を行うか否かについて、(3) そうした行為の中に外化・表出される個々人の人柄・性格への是認/否認という仕方で評価が行われる、という徳倫理学的道德観が、これら人格関連訳語のネットワークを支えていることは明白である⁸。ただし、それがどの程度伝統追隨的であり、あるいは近代化され、疑似身分制化されているかという問いは残る。とくに漢字を形態素とする言語においては、意味変容の有無を突き止めることは一層困難である。本稿で取り上げた英華字典ではその数は限定的ながら新造語が用いられている。しかしその場合も在来漢字の新たな組み合わせで済むため、ヨーロッパ言語に比して新語意識ははるかに希薄である(沈国威 2008、147)。この他、人格関連漢訳語の調査分析という課題を遂行する上での問題点と課題を数え上げ、今後のプロジェクト遂行の指針としたい。

- 当時の英語と中国語の両方においてコーパスに基づく調査分析が必要である。
- なかでも、西洋の思想的背景を持つ学術用語としての **Person** の翻訳・受容という観点では、漢訳洋書やそれを踏まえた英華字典が貴重な資料となる。しかし、漢訳洋書出版の第一期は言うに及ばず、第二期に属する漢訳洋書も、そのほとんどが自然科学分野のものである。人文社会分野の文献は、「万国公法」など非常に限られている(沈力衛 2001、271)⁹。
- この限界を補う資料として、本稿では第二期の英華字典に基づく調査分析に着手したが、この手法の最大のネックは、モリソン『中国語字典』が『康熙字典』をベースに編纂されたこと、また、メドハーストは英華字典の編纂に華英字典の編纂を先行させたことである。この手法による限り、中国語に西洋語の人格概念に相当する概念が

存在しなければ、英華字典の **Person** の項にも西洋独特の語義やニュアンスが見いだされるはずもないからである。宮本（2010、70）の抽出調査によれば、モリソンの華英字典と英華字典の一致度は 8 割に及んでいる。

- 逆に言えば、残りの 2 割の中に西洋語 **Person** の独自の語義が盛り込まれている可能性も否定はできない。編者たちはプロテスタントの宣教師であり、キリスト教学においてこの語が占める重要性は熟知していたはずだからである。
- 他方、英華字典は、布教目的だけでなく、広く中国語学習者のために編纂されたという経緯を持つ。したがって、日常語としての **Person** 以上の語義を盛り込む必要はなかったとも考えられる。
- このような事情もあり、新造語〈人格〉の原語 **Person** が西洋哲学（とくに法哲学、倫理学）およびキリスト教学の中核的概念であることを踏まえた訳語研究は皆無に等しい。この点で、むしろ漢訳洋書第一期の「天主教」関連訳書とそれを巡る論争の中にヒントを求めることができるかもしれない。禁教による断絶が日本より短かった中国においてはなおさらである¹⁰。
- 本プロジェクトにとって決定的に重要なのは、これらの英華字典の中には一度ならず日本で翻刻され、少なからぬ影響を与えたものがあるにもかかわらず、新造語〈人格〉はもちろん、それ以外の訳語（人位、人品など）もこれらの中にまったく見出せないという事実である。このことは、近代初頭の日本において **Person** の極めて様々な訳語を考案した作家たちが、従来の漢訳語では **Person** の語義を尽くしていないという点では一致していたことを強く示唆している。

おわりに

19 世紀後半は社会科学の勃興期であった。幸か不幸か、英華字典の影響の下で近代日本が西洋近代語の翻訳を活発化した時期、これらの分野の学術用語を新造語によって取り込むことが切迫した課題となった。例えば幕末に西周がライデン大学に派遣された際の重要な使命は、条約交渉を進めるうえで必要な万国公法の翻訳であった。そこで次稿では、上記第二期の漢訳洋書のうち、数少ない人文社会分野の文献である「万国公法」（1864）¹¹を手掛かりに、西周による訳語〈人身〉とのつながりの有無も含めて、（法）哲学用語〈人格〉の素性をさらに探してみたい。

文献表（50 音順）

後藤弘志：Die Rezeptionsgeschichte des Personbegriffs in der Moderne Japans. In:

Geschichte - Gesellschaft - Geltung, hg. von M. Quante. Hamburg 2016, pp. 241-255.

佐古純一郎『近代日本思想史における人格観念の成立』、1995年、朝文社。

朱鳳『モリソンの「華英・英華字典」と東西文化交流』、白帝社、2009。

孫建軍「西洋人宣教師の造った新漢語と造語の限界：一九世紀中頃までの漢訳洋書を中心に」、『日本研究 30』（国際日本文化研究センター紀要）、2005、pp. 323-337。

沈国威著『近代日中語彙交流史』、笠間書院、1994。

陳力衛著『和製漢語の形成とその展開』（汲古書院、2001）

陳力衛・倉島節尚「19世紀英華字典5種解題」（『或問 WAKUMON 119』、No. 11、2006、pp. 119-126。

宮本和子著『英華辞典の総合的研究：19世紀を中心として』、白帝社、2010。

参考文献

内田慶市著『近代における東西言語文化接触の問題』、関西大学出版部、2001。

真田治子著『近代日本語における学術用語の成立と定着』、絢文社、2002。

森岡健二編著『近代語の成立 明治期語彙編』、明治書院、1969。

劉建輝「近代中国におけるプロテスタント宣教師の文化活動：上海・墨海書館を中心に」、『日本研究 30』（国際日本文化研究センター紀要）、2005、pp. 295-304。

注

- ¹ 本稿における〈字典〉という表現について言及しておきたい。後述するように、本稿で取り上げる英語・中国語辞典の嚆矢であるモリソンの辞書の中国語タイトルが『中国語字典』となっているのは、『康熙字典』をよりどころにしたためである（朱 2009、20）。これを踏まえて沈力衛（2001、270）は、日本の英和・和英辞典類における西洋近代学術用語の翻訳過程に影響を及ぼしたモリソン以下の一連の英語・中国語辞典を「英華字典」と総称し、和製漢語の逆輸入の時期にあたる英語・中国語辞典を「英華辞典」と呼んで使い分けている。本稿の〈字典〉という表現もこれを踏襲する。
- ² 沈力衛は（2001、271）その原因の一つとして、当時の清朝廷にとって、宗教関係の本があまり好ましくなかったことを挙げている。
- ³ 『哲学字彙』初版（1881）では、Personality には〈人品〉、Person には〈人、本身〉の語が当てられている。1884年の第二版では Person に〈身位〉が加わるが、〈人格〉という訳語は1911年の第三版『英独仏和哲学字彙』を待たなければならない。
- ⁴ 朱（2009、138）は、モリソンの辞書成立以前の中国語字典とも対比しながら、モリソンの訳語がむしろ逐字逐語対応させた直訳であるとしている。
- ⁵ 宮本（2010、16）は『中国語字典』が長崎の日本人のあいだでもてはやされていると知ったモリソンが雀躍りして、長崎の蘭通詞吉雄権之助に自著を贈るよう手配したという経緯を紹介している。
- ⁶ メドハーストが英華字典に先立って1830年に刊行した英和・和英辞典は、最初の英和・和英辞典として貴重であり、英華字典との関係という観点でも興味深いが、簡易な語彙集のレベルを越えるものではない。

- 7 これと対称的に、ロプシャイトの英華字典の漢訳語に訓を付して本邦に紹介した津田仙他訳『英華和訳字典. 坤』山内輓、1881)では、英語の *Personality* の中国語訳〈爲人〉に「ヒタルコト」という訓が当てられている。また井上哲次郎は「人の人たる所以の特性」を普遍的な意味に解した上で、「この意味での「人柄」と補足して、〈人柄〉という語自体を普遍化している (Goto 2016 参照)。井上にとって、新造語〈人格〉が必要な理由のひとつが垣間見える。
- 8 なによりも、*Virtue* 〈徳〉の項が、これら人格関連訳語の項目よりもはるかに充実していることが、このことを裏付けている。
- 9 同時期に日本政府が外交官を送って、当時入手可能な漢訳洋書をほぼすべて購入し、学術の発展のために供しているが、これらももっぱら自然科学分野のものに限られている (沈力衛 2001、271)。
- 10 沈国威 (2008、150 以下) は、日本語からの借用語を突き止めることを目的として、ロプシャイト『英華字典』の訳語と現代の一般的訳語を突き合せた結果、両者が一致するケースとして、キリスト教関連の用語が多いこと、その他の語も、宣教師によってもたらされた世界地理の知識や、西洋の文物を表す領域に集中していることを指摘し、これらの語が、ロプシャイトやその前後の英華字典にはある程度整備されていたという見解を示している (同書 163 以下も参照)。ただし、この課題は当該プロジェクトの枠を越えている。
- 11 アメリカ人宣教師マーティン (William A P. Martin) による Henry Wheaton, *Elements of International Law* (1836) の翻訳 (孫健軍 2005 参照)。

※本研究は JSPS 科研費 JP19K00007 の助成を受けたものです。